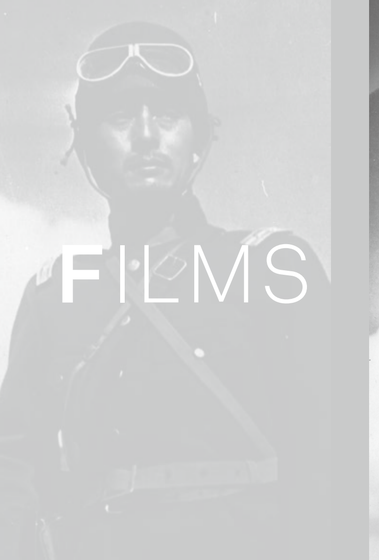

NFC所蔵作品選集

MoMAK FILMS 2015 08 Aug. 10 Oct.

Information

上映時間｜各回14:00–18:00頃（開場は13:30）
7月31日土のみ19:00-上映
上映作品は予告なく変更する場合があります。
上映作品、各回のスケジュールについては京都国立近代美術館HPにて確認ください。
www.momak.go.jp/films/

料金｜1プログラム520円（当日券のみ）
*本券でコレクション展もご覧いただけます。

会場　京都国立近代美術館 1階講堂

先着100席
入場券は会場入口にて販売します。
当日13:30（7月31日のみ18:00）より当日分のすべての作品の整理番号つき入場券を販売、開場します。各回入替制です。2回目は上映開始の10分前に開場します。会場内での飲食はご遠慮ください。

主催　京都国立近代美術館（MoMAK）
東京国立近代美術館フィルムセンター（NFC）

東京国立近代美術館フィルムセンター
National Film Center
The National Museum of Modern Art, Tokyo

企画協力｜北小路隆志（映画評論家／京都造形芸術大学准教授）
板倉史明（神戸大学大学院准教授）

Exhibition

同時開催中の展覧会

ポスターにみる ミュージカル映画の世界
会期｜2015年6月6日［土］— 8月16日［日］

北大路魯山人の美 和食の天才展
会期｜2015年6月19日［土］— 8月16日［日］

栗木達介展
会期｜2015年8月28日［金］— 9月27日［日］

琳派イメージ展
会期｜2015年10月9日［金］— 11月23日［月・祝］

access

京都国立近代美術館
〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町
TEL　075 761 4111
www.momak.go.jp

JR・近鉄京都駅前（A1のりば）から市バス5番 岩倉行 —
［岡崎公園 美術館・平安神宮前］下車すぐ
JR・近鉄京都駅前（D1のりば）から市バス100番（急行）錦聞寺行 —
［岡崎公園 美術館・平安神宮前］下車すぐ
阪急烏丸駅・河原町駅、京阪三条駅から市バス5番 岩倉行 —
［岡崎公園 美術館・平安神宮前］下車すぐ
阪急烏丸駅・河原町駅、京阪祇園四条駅から市バス46番 平安神宮行 —
［岡崎公園 美術館・平安神宮前］下車すぐ
市バス他系統「東山二条・岡崎公園口」または —
［岡崎公園 ロームシアター京都・みやこめっせ前］下車徒歩約5分
地下鉄東西線「東山」駅下車徒歩約10分 —

MoMAK F Column

← 007 →

食卓のある映画：成瀬巳喜男の『浮雲』

成瀬巳喜男は「女性映画の監督」として知られ、1950年代に製作した林芙美子（1903–51）原作の6つの翻案映画により高い評価を得た。成瀬と林の作品はともに、社会の底辺と周縁を放浪する（多くの場合単身の）女性主人公が、経済的・社会的困難を経験しながらも、イデオロギー、政治／仏教、社会運動に関わることなく、「個人」として快活に生き、働きながら、「内的」葛藤に打ち克つ「庶民」であったと一般的に理解されてきた。

しかし本稿では、成瀬の映画作品における視覚的なメタファーに着目し、社会の下層と辺境を移動する女性の身体と食空間の表象を、政治的・歴史的な介入と交渉の場として考察したい。戦後10年目に製作された『浮雲』（1955）では、社会の底辺と周縁を放浪する単身女性・ゆき子の身体と食空間の表象が、日本近代帝国の伸展と崩壊の物語と記憶を鮮やかに描き出している。

『浮雲』の主人公ゆき子は戦前に静岡の実家を離れ、東京で義兄・伊達の家に居候しながらタイピングスクールに通うが、戦中に農林省のタイピストとして日本軍占領下のフランス領インドシナ（仏印、現ベトナム）に渡り、既婚の官僚・富岡と恋をする。戦後、廃墟と化した米軍占領下の日本に引き揚げ、米兵ジョオの組婦になるが、富岡との関係を続け、中絶による身体の侵害と虚弱に苦しみ、そして戦中への郷愁を覚えながら闇口を凌いでいる。粗末な東京のアパートのちゃぶ台でやかんを手にし、富岡に給仕するゆき子の姿は、フラッシュバックで挿入される、戦中の仏印ダラットの食卓シーンと対照的である。

仏印では明るく広大な森林を背景に、フランス人植民者の屋敷を官舎として接収した日本「皇軍」とともに働くゆき子は、日本では無縁であった官僚たちと会食の席につく。白いテーブルクロスの上に並べられた料理と「白菊菊酒」は、現地のメイドによって給仕される。この食卓のシーンは、「大日本帝国」が西欧帝国（フランス）と同一化し、さらに西欧帝国にとって代わって「大東亜共栄圏」建設の名のもとに「アジア」の支配を果たしていることを具体的かつ直接的に物語っており、ゆき子がその分け前を味わっていることも明確になる。ジョン・ダワーは、世界の多くの国が西欧列強の支配化に置かれたのに対し、日本は西欧を模倣し、同一化を果たしたとし、そのメタファーとして日本人が西洋人と同じbanquet（晩餐会）に参加したと述べているが、ゆき子が参加した会食で経験する身体の豊かさ、力、そして開放感は、フランス帝国にとって代わった日本帝国の臣民の、そして植民者の経験である。ゆき子を論じる場合、日本の中心地である東京と国家／家の制度から外れた単身女性の辺境における「個人的な」経験として解釈されてきた。しかし、ゆき子の「個人的」な経験の政治性は、政府先導のナショナリズムとその産物である「大日本帝国」との関係性のなかで生まれたものであり、そのことが仏印での食卓シーンにおいて鮮明に描写されているといえる。

成瀬作品における女性の身体と食空間の視覚的描写を分析することは、映画作品を歴史的・社会的・政治的な構築と論争の場として読解するひとつの試みであるといえよう[1]。

*1 詳しい論考は、堀口典子「移動する身体—林芙美子原作、成瀬巳喜男の翻案映画をめぐって」、斎藤綾子編『映画と身体／性』日本映画史叢書第6巻、森話社、2006年、221-266頁、Noriko J. Horiguchi, *Women Adrift: The Literature of Japan's Imperial Body*, University of Minnesota Press, 2011を参照されたい。

堀口典子（テネシー大学 准教授）